

近代年画の出現と絵師の役割

－彭翼仲の提唱を受容した改良年画の展開を中心に

辻（川瀬）千春

0. はじめに

年画は旧正月に装飾と祈願を兼ねて、門扉や室内に貼付される絵画で、年末に貼付したら朽ちるまで破がされない。伝統的な年画は、木版により、明快な刻線に原色を施す。庶民が周知する題材の同音異義の漢字で吉祥慶事を表すのを特徴とする。漢代を起源とし北宋期に庶民の旧正月の飾り絵となった。明・清代にかけて中国各地に年画の産地を形成し、年画は漢民族の風俗習慣の一つとして定着していった。このような庶民のささやかな慰安であった素朴な飾り絵は、アヘン戦争（1939.11-1942.8）の勃発を契機とする激動の近代の幕開けとともに、新たなジャンルを形成し、新たな意義を付帯して展開していく。

方漢奇（1981上：7-9）が、近代に発行された新聞の原初的形態として、アヘン戦争に前後して起こった反帝闘争の中で、庶民がその宣伝に使った貼り紙や小冊子をあげる。そしてそれらと並ぶ有効な宣伝手段として時事画をあげている。アヘン戦争時にすでに民衆は絵画を運用して大量の時事画や風刺画を配布し、反帝闘争を行う方法を知っていたとする。その成功例として図版は示されていないが、木版の「大敗鬼子図」や「芝相行楽図」、アヘン禁煙の1枚物の漫画をあげる。また薄松年（1986：157）は、林則徐が英軍との戦いを指導する場面を描いた「林文忠得勝図」を例として、アヘン戦争直後にそれを題材とした年画が現れていたと指摘している。

そして曾国藩（1811-1872）が1870年7月23日付けの宝炳齋（1807-1891）への返信の中で、同年6月に発生した天津における、フランスのキリスト教会（仁慈堂）に対する民衆の暴動（天津教案）について述べた中に、「天津民情囂張如故，將打殺洋人画図刻板，刷印斗方扇面以鳴得意」という一文がある（唐浩明 1994：7235-7236）。つまり天津の民情がやぶさかでないことはかねてより

変わりなく、西洋人を撲殺するさまを描いた木版画などの印行に、その狂喜の様子が見てとれるという。国家の幹部が反帝の意を表した図画に目を止めるほど、それらが流通していたことがわかる。

こうした図版は清仏戦争（1884. 8-1885. 6）以降さらに盛んに流通して、僻地の人々にも国情を伝え、国民意識の形成や愛国心の高揚、政治への関心を喚起した。その背景には、洋務運動の一環として電信電報機関が設置され、従軍記者によって電報で伝えられた戦況や事件を翌日から3日のうちには新聞が速報するようになり、また新聞報道に図版が用いられるようにもなり（方漢奇 1981上：52-55）、庶民が情報を得易くなったことがあげられる。そして新聞報道などで得た情報にもとづいて、上海や蘇州の年画の絵師たちが、それらを画面に具現化し庶民に還元していった。こうした年画をはじめとする時事版画の流通の増加は、国内外の時事や珍聞奇談を扱う画報（『点石斎画報』（申報館）1884. 5-1896. 12）の創刊も促したほどであった（辻（川瀬） 2004：244）。そしてその図版は、やはり年画の絵師たちが担当した。彼らがこうした報道図版を手掛けていたことは、庶民の要望と社会の動静の双方に通じ、自らも進取の精神を持ち合わせていたことを窺わせる。

このように庶民に流通する年画をはじめとする摺りものに現れていた反帝愛国の思いは、日清戦争（1894. 8-1895. 4）以降になると、自国の強化と再興を期す維新改良の動きとともに一層顕著になる。庶民の間では、日清戦争以降になると、画店だけでなく天津の砂糖の小売店が小型の木版戦争画を売るようにもなり（王樹村 1991下：539）、時事への関心がますます高まっていたことがわかる。一方官側でも、康有為（1858-1927）や梁啓超（1873-1929）が反帝愛国、維新改良を訴え、政府や知識層に影響を与え戊戌の政変（1898. 6-9）が起き、また義和団事変（1900. 6-1901. 9）の後には、政府も漸く改革の動きを見せ始めた。そして彭翼仲（1864-1921）においては、国都北京を拠点として新聞や画報を用いて、庶民を対象として愛国のために社会の改良を呼びかけ、啓蒙活動を推進した。彼の提唱に敏感に反応したのが、隣接する年画産地、天津楊柳青の絵師たちであった。

本稿では、とくに近代社会に反帝愛国、維新改良の気運を高揚させることとなった新しいジャンルの年画の展開、及びその作り手である絵師の視点に着目したい。新中国では為政者が、年画を国策宣伝に有効な視覚媒体として用いて

いる（辻（川瀬）2003）。そのような革命推進の重要な歯車に組み込まれる以前の、絵師本来の姿に立ち返り、彼らが社会の動きや庶民の思いをどのように捉え、また何を民衆に伝えているのか考察することをねらいとする。

第1節では、列強の中国侵攻に果敢に挑む自国軍及び民衆を題材とした年画に、絵師の思いを読みとっていく。とくにその数が急増し体系的に現存年画を検討できる、清仏戦争以降の年画を対象として取り上げる。ついで第2節では、彭翼仲の活動が年画に与えた影響について考察する。なお先行研究でそのことがたびたび言及され、とくに彭翼仲が創刊した新聞（『京話日報』）で年画の改良を提唱したとされるが、具体的な典拠が示されることはなかった¹。そこで関係資料の調査を踏まえて、先行研究における不明確な記述の是正も行っていく。第3節では、彭の提唱を受けて、絵師によって実行された年画の改良が、時の為政者に与えた影響について考察する。そして第4節では近代文化の流入を絵師がどのように捉え、何を伝えようとしたのか、年画を分析しその意義について検討する。

なお本稿では、年画史における呼称に従い、従来の吉祥物などの非現実的な題材によるものを伝統年画とし、近代に現れた特異なものを近代年画とする。そしてそのうち、とくに戦闘や近代文化を取り上げたものを時事年画、口語体の挿入文や民衆への教育や啓蒙作用を期して制作されたものを改良年画と呼称する。また文中で言及する年画には、題目の後ろに産地がわかるものについてはそれを（ ）で付記した。

1. 帝国主義列強との戦いを描いた時事年画

清仏戦争を題材とした年画は、劉永福（1837-1917）の率いる黒旗軍の勝利を描いた「劉提督水戰得勝図」（楊柳青）、「劉軍大勝法軍」（上海）などや、岑帥すなわち岑毓英（1829-1889）の軍隊によるベトナム北部における戦闘場面を描いた「岑帥監督夜復北寧得勝全図」（上海）、仏軍の奇襲を迎撃する福建海軍の活躍を描いた「長門捷報」（上海）などがある。これらは、いずれも仏軍に大勝する場面を捉えている。そして、「広東日報館來電」などの現地速報を表す文言や戦況報告文とともに描かれ、信憑性や現実性を強調した時事年画となっている。

清仏戦争は実際、年画が捉えたように陸軍においては清軍側が優勢で（市古

宙三1990:125)、両者の攻防は紛糾した。しかし最終的に仏側の要請に応じて締結した天津条約は、ベトナムにおける保護権を承認し、また清国との陸路貿易を許可し、あらゆる点で仏側の要求に応じたものであった。

図1-1は締結の場面を捉えた、呉友如(?-1893)による「法人求和」と題された年画である。呉友如は、『点石斎画報』にも同じ題材の「和議画押」(図1-2)を描いている。呉はもともと年画の絵師であったが、技量に優れ宮廷にも呼ばれるほどであった。のちに申報館に引き抜かれ本画報の中心的な絵師になった。両図を比較すると、後者は遠近法により会場全部を見渡せるように描かれ、画面に条約内容が挿入され、室内の調度や各国領事まで細かに描かれている。一方前者は余分な調度品は省かれ、李鴻章(1823-1901)をはじめとする清国側代表と、「法人孤拔」の文字が見える仏側代表のほか、英独の代表が描かれる。表題の如く清国側が上座に立って、彼らから拝礼を受けているさまに焦点が当てられている。孤拔(Courbet, Amédée Anatole Prosper)(1827-1885)は、『点石斎画報』にも記事が掲載されたり(「法酋孤拔」(張奇明 2001-1:144))、彼の死後その経歴を紹介する文章とともに肖像が掲載されており(「孤拔真像」(張奇明 2001-2:55))、中国の庶民も周知の敵将である。

中国の疲弊を暴露し、列強の侵攻を一層加速することになった日清戦争に取材したものも、「月夜大戦高麗平壤城」、「炮打日本国」(図2)(山東省楊家埠)など数多く印行されている。清軍の砲弾が日本軍を猛攻撃するさまを描いた図2は、画面左側の清軍の銃砲はまっすぐ日本軍に向けられ、銃火が描かれているが、日本軍側の銃砲からは銃火が見られないばかりか敵側を向いておらず、陣営も乱れている。また日本軍の後方には外国人と見られる人々が描かれ、その上部には「和義(義は議の誤り=筆者)」の文字が見える。これは日清戦争の結末を示したもので、列強諸国の調停下に下関条約(日清講和条約)の締結に至ったことを暗示している。そして歴史が示すように、戦闘は近代化された日本軍が優勢で、清国は95年4月17日に講和条約の締結を余儀なくされた。その下関条約締結の場面を捉えたものが「両国合好」(楊家埠)である。絵師の操作によるのか、誤った情報によるものかはわからないが、上部には清軍が百戦百勝し、日本側が和議を求めて締結に至ったとの文言がある。また中央には、跪きながら「日本請之」と封面に書かれた書状を差し出すのが見える。

また前掲と同じ場面を捉えた「各国欽差会同李伝相義和図」(図3)(蘇州桃花

塙)は、中央に「李傅相」すなわち中国側の全権大使李鴻章と、「倭相伊藤」すなわち日本側の首相伊藤博文(1841-1909)が描かれている。右側には抗戦の火種となった「高麗欽差」(朝鮮公使)も見える。また李鴻章の前には、日本側の軍人と見られる人物が描かれる。その傍らには「刺客小山」の文字が挿入され、後ろ手に何かを隠し持って睨みを利かせている。そのほか露英仏など列強の代表が見守り、物々しい雰囲気での講和条約の調印であったことを物語る。

また下関条約締結後に、条約で割譲された台湾に日本軍が侵攻する際の中国側の抵抗を描いたものも複数ある。そこには前掲した清仏戦争の時事年画にもその名がたびたび見られた、劉永福が描かれたものが少なくない。劉は、太平天国軍に参加し、乱が平定されると、自ら桂、貴州の辺境に黒旗軍を組織した。清仏戦争時には仏軍を大敗させた後、清政府の指揮下に収まり、日清戦争においても活躍した庶民の英雄である。1894年に黒旗軍を率いて台湾の防衛に当たり、同年9月には台南に移転して、土着民からなる義勇軍と協調して日本軍の攻撃に当たり、翌年に軍民抗日の首領となった。こうした劉の指揮下に展開された一連の戦いは、「劉永福台北水戦大勝図」(上海)、「劉永福鎮守台南会同生番大勝」(上海)などとして捉えられている。

そうした中に、「厦門(アモイ)各商号」からの通信、と典拠を記す解説文が挿入された「劉大將軍擒獲倭督樺山審問」(図4)(上海)がある。本図には表題の如く、劉永福の前に捕虜となって跪く「倭総督樺山氏」の姿が見える。これは樺山資紀(1837-1922)のことで、95年5月に初代台湾総督として台湾に上陸し、その後96年には第2次松方正義内閣の内務大臣となるなどして、捕虜とされた事実はない。情報源での誤りか、絵師によって故意に表されたのかは定かではないが、敵軍の将を捉えた様子に庶民は自信を深め、愛国心を一層高揚させたであろう。

また「孫夫人会同劉小姐台中彰化縣大勝」(図5)(上海)は、挿入文には、日本軍との戦いで夫を亡くした孫夫人が部下を召集し、劉小姐とともに軍隊を率い、ついに彰化県を取り戻し、日本軍の死傷者は数千人にのぼったなどとあり、女傑と讃える。両名についての詳細は管見に入っていないが、図の右上方に「劉帥親陣」の文字とともに描かれているのは、劉永福である。このほか、日本軍が台湾での敗戦を機に軍事強化を図り、戦闘や後方の活動などに従事させるべく、老若男女を問わず徴兵する様を描いたもの(「東洋各戸抽丁図」(上海))な

どもある。

そして国都北京を揺るがし、清朝に封建体制の改革を余儀なくさせた義和団事変も、様々な場面から捉えられている。「回復天津」(楊柳青)は、聂士成(?-1900)による天津奪回の激戦を描いたもの。清仏、日清戦争以来の勇将聂士成は、義和団の乱においても、清軍を率いて八国連合軍に当たるが、激戦の中で壮絶な死を遂げたという。表題とは異なり、7月14日に天津は陥落したが、本図は彼の勇士を讃えるために刻出されたのであろう。

そして史実を辿れば、1900年8月5日の未明、日本軍を先鋒とする八国連合軍が北倉に侵攻した。北倉は天津近郊にある政府の糧秣の備蓄基地で、清軍1万5千人がその防衛に組織された。未明に始まった戦闘は午前9時には北倉が陥落し、清軍は楊村に退き、同7日には楊村も陥落している。こうした一連の戦いを描いた年画には、「天津北倉義和団民大破洋兵」(楊柳青)や「天津北倉中西陸戦大勝」があり、いずれも北倉で八国連合軍を大破する様子を捉えている。

また「李鑑帥勤王路遇西兵図」(上海)は、表題などから、李鑑帥すなわち李秉衡(1830-1900)の統監下に編成された勤王軍が、日本軍を中心とする北京へ進撃した八国連合軍と北京近郊で遭遇し、その戦闘場面を描いたもの。挿入文には、日本側に千余人の死者を出し、北京では勇氣百倍を得たとある。前掲のように八国連合軍は楊村を陥落させ、さらに北京に向けて軍を進めるが、国都北京への侵攻を許せば、まさに国家滅亡の危機に直面する事態である。それを未然に防ぐことは勇氣百倍の出来事であろう。ところが実際は、西太后(1835-1908)の命を受けて李鑑帥の勤王軍が派遣され、8月8日に両軍は天津郊外の羊房村で遭遇するが、翌日には清軍側が敗退した。そして西太后の期待を一身に受けた李は、慚愧の余り自殺し、8月14日に北京城内が侵攻されると、翌朝未明に西太后は逃亡した。

こうした庶民の願いを表した時事年画の中には、「天津董軍門会同剛中堂校習三軍水陸操演図」(上海)のように、戦闘の英雄による水陸戦の演習の様子を描いたものもある。董軍門とは、八国連合軍による北京侵攻に抗し勝利するさまが多く描かれる董福祥(1840-1908)の軍隊のことである。例えば「董軍門楊村設計敵西兵図」(上海)や「董軍門設計大破西兵」、「天津埋伏地雷、董軍門大勝西兵」などがある。董福祥は、1862年甘肅省の回教徒の乱で起兵したのち、

清軍に投降し、その後清軍の要職を歴任し、1897年に北京の防衛を命じられた。董とともに名前を連ねる剛中堂（中堂は大学士に対する当時の呼称）とは、剛毅（1834-1900）のことで、軍機大臣を勤めるが、義和団の招撫を主張し、各国大使館を包囲した。こうした英雄による軍事演習の様子を描き、その力強さを誇示することで民衆に希望と誇りを与えることを狙ったのかも知れない。また董については民衆とともに列強と戦った英雄として彼の立ち姿を描いた「董福祥画像」（蘇州）もあり、庶民に人気の武将であったことがわかる。「李欽差督陣宋官保大破外兵」（上海）も、李鴻章の総監下に、やはり忠国の英雄として人気のある老将宋慶（1820-1902）の活躍が描かれ、前線における各軍の統領として八国連合軍と対戦し勝利するさまを捉える。

このほか「奉天紳民協助餉銀，楊大元帥誓滅俄兵」は、奉天の官民が兵費を拠出し、楊が露兵を滅ぼすことを誓うという場面。奉天は遼寧河中下流域にあり、北は松花江流域に、南は海に達し、東は朝鮮半島に接する地域。八国連合軍に参加した帝政ロシアが、7月に東北地区に侵攻し、同年10月1日に瀋陽を占領し東北三省は陥落した。清政府は露側との交渉に当たる全權大使として楊儒（?-1902）を派遣した。楊は露側との領土割譲をめぐる再三に渡る交渉を断固として拒絶したため、露側に傷つけられ、その傷がもとで死亡した、忠国の志士である。表題に見える楊とは、この楊儒かと思われる。また「捉拿倭俄奸審問正法」（蘇州）には、天津の義和団が日本やロシアのスパイを容赦なく緊縛し捕らえるさまが描かれ、列強の侵攻に対する怒りが露にされている。

また「日独両軍大戦青島図」（河北省武強）や「日独争戦青島図」（山東省平度）は、中国の權益を巡る列強同士の戦いである青島での日独戦争を描いた年画である。図版には、「二国不合」「日本飛艇打戦青島」「德国飛船觀陣」などの文言も挿入されている。市井で繰り返される列強諸国の横暴な振る舞いを捉えたもので、反帝国の思いを高揚させたと思われる。

このように旧正月の飾り絵として禁忌されてきた戦闘場面を描いた時事年画は、帝国主義列強の侵攻が繰り返される中で、ますますその数を増やしていった。その中で戦闘の英雄が取り上げられ、史実に関わらず自国の勝利や敵将の捕獲などが報じられ、庶民の士気を高めていった。

2. 彭翼仲の提唱と改良年画の展開

彭翼仲は、名を詒孫、字は翼仲、江蘇省長州県（現蘇州市）を原籍とする。祖父彭蘊章が咸豊年間（1851-1861）に武英殿の大学士軍機大臣をしており、祖父宅で生まれその後も北京に居住する。官職に就くが、義和団事変による八国連合軍の北京侵攻を目の当たりにしたのを契機として、反帝愛国、維新改良をかかげて啓蒙活動に没頭していく。彼はその活動の対象に庶民を据え、彼らが理解できるように彼らの文化を利用し、またその改良を促すことで啓蒙活動を展開していった。そうした活動の中で、彭は年画が庶民に及ぼす影響にも言及し、一方で絵師たちは彼が創刊した画報や新聞での提唱を年画に具現化させている。

彼は生涯に3種の画報及び新聞を創刊している。始めに図画と口語体の解説文による子ども向けの『啓蒙画報』（1902.6-1904.12頃）、ついで一般大衆向けの口語文による『京話日報』（1904.8-1906.9、1913.8-1915.？、1916.？-1922.4）、そして官界に向けて文語文で『中華報』（1904.12-1906.9）を刊行した。『中華報』は官側の知識を広げ維新改良を提唱し、彼らを啓蒙するために創刊され、国内外のニュースや政治論説を主とした。『啓蒙画報』と『京話日報』は、庶民に愛国心を高揚させ、封建的な社会及び思考の改良の必要性を説き、逼迫した社会情勢を知らせることなどを目的とした。そしてとくに庶民を対象とした両紙が、発行地北京に隣接する天津楊柳青の年画に影響を与えることとなった。

ところで『啓蒙画報』は、発行期日が1日1枚、半月刊、月刊などとたびたび変更され、また合本されて一月毎に発刊されるなどした。さらに求めに応じ重版も行い、その際に目録を付して発行年月日が削除されるなどしたために、実見した合本版では目録、冊号、頁は記されているものの、厳密に発行年月日を特定することができない。また『京話日報』は日刊とされるが、やはり同様に号数頁数が記されているほかは、発行年月日などの記載がない。そこで本稿では、『啓蒙画報』については姜緯堂（1985）及び北京大学図書館で収蔵時に付された発行年により検討したものを、『京話日報』は北京大学図書館による発行年を採用する²。以下『啓蒙画報』を引用する場合、記事題目に記事分類項目及び発行年、冊号、頁の順に付記する。『京話日報』については、記事題目に発行年、号数、頁の順に付記することとした。調査対象としたのは、同館における全所蔵分で、『啓蒙画報』については1902年第1冊から1903年第12冊まで、『京話日報』は1904年第1号から1906年第751号とする。

『啓蒙画報』は発行時期によって異なるが、概ね倫理、地理、物理化学、歴史、算術、動植物学、その他などの項目に分けて、劉炳堂（1866-1924）による図版とその解説が半分づつ掲載されている。劉は年画の絵師などではなく、幼少時から国画に長け、写生を重視し、また独自に西洋の画法も習得し、その作品は宮中にも収蔵された。しかしかえって王侯貴族との交わりを拒み、庶民との交流を好んだ。また八国連合軍の脅威にも遭遇しており、境遇も考え方も似た彭翼仲の熱心な支持者であった（林培炎 2004：8-9）。

本画報はイソップの寓話や中国の烈女伝などといった、国内外の事例や故事などを引用し、愛国、強国のために女子の教育や労働及び纏足の禁止、アヘン吸引の害悪などを説いた。また子どもの学力向上や道德教育をねらいとした論説などが、分かり易い口語体で記されている。その内容を視覚的に表した図画が、文字の読めない庶民の目にも楽しませた。

本画報が、年画やその絵師にどのような影響を与えていたのであろうか。これまで王樹村（1995：109）により、「小児怒」（図6-1）の口語体の挿入文と同文の記述が、典拠は示されないが本誌に掲載されていることが指摘されていた。挿入文には、少年と父母との問答の中で、学校教育の普及の遅滞と官吏の腐敗について述べられている。そして、それは本画報の記事「小児怒」（図6-2）（雑俎、1902年第2冊20頁）に確認された。ところが本画報には、この他にもいくつか、楊柳青の年画の挿入文とほぼ同文の解説文及び表題のものが確認される。

本画報に掲載された「礼尚往来」（図7-1）（倫理、1902年第5冊23頁）はイソップの寓話で、狐が嘴の長い鶴にご馳走するのに皿を用いたため、鶴はみすみすご馳走が食べられなかった。恨んだ鶴が返礼として狐に細長い器でご馳走を出し、やはり狐は食すことができなかったというもので、相手のことを考えて礼を尽くすべきことを説く。同名の年画（図7-2）の上部にはほぼ同じ文章が挿入されている。

また本画報の「一相情願」（図8）（倫理、1902年第6冊1頁）の解説文と、年画は公開されていないが、王樹村（1995：111）に掲載された年画「一心情願」の挿入文もほぼ同一である。その内容は、村に一つしかない生活用の井戸に、飯碗を落とした人がいた。村人は井戸水が濁るのでやめるよう再三注意したが聞き入れず、その人は井戸をさんざんにかき回し、結局飯碗も探せず、水も飲めなくなってしまい、村人からも遠ざけられたという話。そして、狼が出たぞと

たびたび嘘をつく少年が、本当に狼が出たときに助けを得られなかった、というイソップの寓話に基づく「莫作谎言」（図9-1）（倫理、1902年第7冊1頁）は、「莫説谎話」（図9-2）の挿入文と概ね一致するだけでなく、図画の構図も類似している。

このほか年画の挿入文と類似の表現が含まれている解説文があるものとして、「論機器」（格致、1902年第3冊5頁）の一部記述が、「女子自強」（図10）の挿入文と一致する。それは、中国が弱小国となっているのは、婦女が纏足をし、万事男子に依存しているためである。男子も疲弊し、その結果婦女も共倒れとなるといった記述である。

これらの改良年画は、いずれも18世紀初頭の創業とされる楊柳青の老舗である斎健隆画店の印行である。第9代目の店主が日本に留学し、自国の現状を目の当たりにしてその再興を期し、彭の提唱を受けて絵師たちにこうした年画の制作を依頼したという（王樹村1998-1：31）。

『啓蒙画報』に次いで創刊した『京話日報』は、北京及び各省のニュースと国内外の緊急ニュースと社説を主とし、庶民の知識、知力の向上をめざした、北京で最初の口語文の新聞であった。価格は庶民の手が届くように飴1個、煙草1本程度に押さえられており、実際に読者層は商店主、手工業者、娼妓、学生、聖職者など様々であった。また政府官吏や知識人など上層の人が見ることも少なくなく、西太后も毎日目を通していたといい、販路は北京だけでなく、西は陝西、甘肅省、東は黒竜江、吉林省に及んだ（梁漱溟 1960：123）。盛時の発行部数は1万部に達したとされる（梁漱溟1960：108）。本紙にイギリス人によるアフリカでの中国人奴隷の虐待や、ドイツ人による侵攻地山東省や北京での市民に対する横暴などが紹介されると、早速関係各国大使などから政府に対処の要請が来たという（梁漱溟 1960：106-108）。本紙が広く読まれて、社会に一定の影響を持っていたことの証左であろう。

彭翼仲が推進してきた反帝愛国、維新改良の活動は、本紙によって一層旺盛に展開されている。前掲のような外国人による自国及び自国民に対する横暴や中国人官吏の腐敗、無能などについて、実際の取材などの論拠に基づき記された。また妓楼の解体やアヘン禁煙など社会の清浄化を呼び掛けた。そして教育の普及を提唱し、自らも学校を開設しそれを実践した。また女性における学問の振興及び経済的独立などの社会参加を積極的に提唱しており、そのための纏

足反対運動も展開した。そして庶民の愛好する演劇や双六などの遊具、劇中の歌などは、彼らの教育や思想に関わるものとして改良を盛んに提唱した³⁾。

そうした中に「改良紗灯図画」(1905年第487号1頁)と題された社説がある。文字の読めない民衆が手にする版画などの図画の改良が提唱されている。その記述は以下の通り。

この世の通例として、どの国でも下等社会の人口が多い。なのに中国の下等社会の人々だけが外国人から侮辱を受けている。また道理をわきまえず、不平不満をぶちまけ、野蛮な行為に走るのは、まさに知力、知識がないからだ。かといって言葉で彼らに教示しようとするのは非常に困難で、本紙で(版画の改良について＝筆者注)意見したこともある。婦女子が見て容易に理解できるよう、版画(原文は印板画＝筆者注)の改良を考えている。

(略)性急に愛国心や学問を教えようとしても徒労に終わってしまう。彼らの習慣をとり入れて、自然に徐々に理解させるようにすれば、彼ら自身で真理を追究するようになる。そこで楊柳青の版画の改良を待ち望むのである。古来の版本を一度に撤廃するのは困難であるが、我々が活字を入れ替えるように、新しいものを加えて旧弊を取り去ってほしい。一ヶ月もしないうちに自然に新しいものに替わっているだろう。不健全な版画が一掃されることを待ち望んでいる。

そして版画の改良よりも、人心を感化するのに最も手っ取り早く簡単に改良できるものとして、正月期や慶事の際に用いる提灯に貼る絵(原文は紗灯画)の改良を提唱する。従来のように封神演技や西遊記、聯斎史話、水滸伝、紅樓夢などの伝説や物語などを描いたものは、民衆の学力向上に寄与しないばかりか、心を乱し、野蛮な思想を植え付ける。大局を理解する皆様、意見するよりも絵画の改良が最も有益です。民衆の知力向上に役立つだけでなく商売も繁盛します、などといった言葉で結ばれている。

本社説には前掲のように、「本紙で(版画の改良について＝筆者注)意見したこともある。」とあるが、これ以前に発行された本紙にそうした記述は確認されなかった。したがって管見の限りにおいて、『京話日報』で楊柳青の地名と版画に言及し、その改良を記したものが、本社説を以て初めて示された。原文には

「印板画」とあるが、楊柳青という地名などからも年画とみてよいであろう。また楊柳青では年画の工房で提灯用の絵も制作しており、正月期に用いるものであれば年画の一種として捉えられている。

このように彭翼仲は識字できない庶民に対する知力の向上、維新改良を念頭においてそれに役立つものとして、彼らが愛好しその生活に密接で、理解の容易な図画の改良にも言及しているのである。のちになって中国共産党の幹部が、兵士や美術の専門家である工作員に対して、識字できない民衆に対する宣伝に視覚媒体を多用することを推奨し、宣伝への庶民文化の活用を示唆する（川瀬 2000：18-24）。一方彭翼仲による年画の改良の提唱は、庶民であり、作り手である絵師に直接的になされた。それが絵師たちに受け入れられて、年画の改良はより迅速に円滑に為されたといえよう。そして『啓蒙画報』の創刊以来一貫して行われてきた、反帝愛国、維新改良の提唱が、人々によく浸透していたことがその背景としてあげられよう。

では本紙における反帝愛国、維新改良を期して行われた様々な提唱を、絵師がどのように受容し年画に反映させているか、その画面に見ていくこととする。

本紙で展開された反帝愛国の活動で、最も広範な支持を得たのが救国募金（原文は国民捐）である。北京で写真館を営み、キリスト教徒でもある王子貞（生没不詳）は、自身も八国連合軍による北京侵攻に遭遇した経験を持つ。彼は本紙の講読所を私費で開設し、その記事などについて解説をしていた。そこで行った八国連合軍に対する賠償金についての演説に基づく社説「尚友講報処的演説」（1905 年第 374 号 1-2 頁）を、彭翼仲と連名で本紙に掲載した。それは、4 億 5 千万両を毎年返済していくと、光緒 60 年以上たって漸く完済でき、利息をあわせると 9 億万両に達する。それを賄うため盛んに民衆から徴税しようとしているが、そのための費用なども含めると民衆が賄うのは 100 億万両でもすまされない。全国 4 億の人が心と力を合わせ、早期に一度にこれを支払えば、国を救い民を救い、ひいては自身を救うことになる、いわゆる救国募金を呼びかけたのであった。

天津楊柳青の斎健隆画店と並ぶ老舗、戴廉増画店による「愛国大撲満」（図 11）という年画がある。そこには以下のような文言が挿入されている。

東安市場会友講報社のト先生 曾在報社門口擺一個大悶葫蘆罐 六尺多高

上写愛国大撲満 并貼着許多国民捐的淺說 每天有一位張瀛曙先生对着悶葫蘆罐演說愛国的道理 為是讓人家一邊聽一邊看 好感動熱心

(訳文：東安市場の会友講報社のト先生は、新聞社の入り口に六尺余りの高さの大きな募金箱を置いた。その上には「愛国の大きな募金箱」と書かれている。募金運動についての簡単な解説文がたくさん貼ってある。毎日張瀛曙という人が募金箱に向かって愛国の道理について講義して、人々は耳を傾けながら貼付物を見ていて、熱心でとても感動する。)

一方本紙にも「愛国大撲満」(1906 年第 589 号 1-2 頁)と題された社説があり、そこには次のような文章が含まれている。

(略)原来東安市場講報処 想出個激勵大衆的法子来 支搭了一個席棚 棚内安放着極大一個撲満 足有四五尺高 上写国民捐白話演說 四周圍貼着各種画図 全是中外古今 愛国自強的故事 ト巽齋張瀛曙一人 每日午前開講 向着這個大撲満 演說愛国的感情 有願認捐的 請到戶部銀行交納 那個撲満 可是不能裝錢 市場上来往的人 感動了不知多少啦

本紙の記述の方が詳細ではあるが、場所も東安市場の新聞講読所、演者も同じ張瀛曙であり、本文に基づき絵師がその様子を絵にして、引用文を挿入したものではないだろうか。

王樹村(1995:113)は、本紙による救国募金の提唱とその広がりについての梁漱暉(1960:110-111)の記述から、年画もその影響を受け、前掲の図11のほか斎健隆画店により「国民捐」が制作され、華北や東北各地に販売され宣伝効果をあげた、とした。ここに本紙に年画の挿入文のもととなる記述が確認され、また絵師が本紙の影響を直接的に受けていたことが具体的に示されたといえよう。

こうして救国募金は、一般市民から政府の官吏、さらには囚人や娼妓まで、全国数百万人から義捐金が寄せられるなどの盛り上がりを見せた。それらは本紙で毎日紹介され、1906年9月に袁世凱(1859-1916)によって彭翼仲が逮捕され、本紙が停刊になるまで盛んに続けられた⁴。

このほか本紙では、既述のように庶民の思想に多大な影響を与えるものとし

て、演劇の改良を訴える論説が度々掲載されている。また女性解放や愛国をテーマとした新劇の宣伝や脚本全編を掲載したものもある。彭は演劇界とのつながりが深く、役者に対して、自分を卑下せず、常に社会教育の一端を担っているとの自覚を持つように説いていたという（梁漱冥 1960：112）。新劇「女子愛国」は、震旦国では仁義忠信を重んじる余り、隣国の侵攻を許してしまった。役人卞良法は国家存亡の危機から脱するため、国家再建を託す賢者を探すうちに、魯憂葵（別名蔡憂基）という女性に尋ね至った。彼女は外国にいる兄から、国外の軍事や政治、経済などについて知識を得ており、纏足の弊害や女性の解放や参戦を訴え、売国的思想などに反対し、良策を提示したという物語。本紙の1906年第635号から同年第664号にわたり、毎号第6頁に脚本を全て掲載する。斎健隆画店の「女子愛国」（図12）は、この劇中場面を捉えた年画で、伝統年画に見られる手法により、人物の傍らに役柄名が挿入されていてわかりやすい。

また彭は、『啓蒙画報』以来アヘンの害悪についても訴えており（「禁止吸煙」掌故学、1903年第9冊20頁）、本紙でもアヘンの禁煙に関する社説などが掲載されている（「狼心断洋煙」1905年第194号1頁）。戊戌の政変以前から社会の改良を訴えた新劇活動を展開していた役者田際雲（1864-1925）は、彭翼仲にもその活動が支持され（梁漱冥1960：112-113）、たびたびその名が本紙でも見られる。たとえば新劇「恵興女子」は、身命をなげうって女性の学問振興のために女学校の開設を訴えた、杭州の女性、瓜爾佳氏恵興（1870-1905）の実話に基づき田際雲が脚本演出主演を手掛けた。本紙の1906年第629号3頁には、その公演に先立ち、本館の王子貞らが登壇してその主旨について演説すると、人々は熱心に聞き入ったとする記事が掲載されている。彭翼仲らと演劇界の人士とが愛国、維新の運動を連携して展開していたことがわかる。また彼が主演したアヘンの禁煙を主題とした「拿櫻徐花」の一場面を捉えた「新排洋煙陣捉拿櫻徐花」（図13）は、河北省の武強年画産地で印行されており、運動の広がりを窺うことができよう。

そしてやはり『啓蒙画報』に始まり本紙に至っても、学校教育の普及や女性の解放を訴えた社説は枚挙にいとまがない。そうした中で学校開設や、女性の学問振興、男女共学や纏足禁止、儒教書を教科書としない新式教育の普及が提唱された。こうした風潮が社会に浸透しつつあること、またそれが遅々として

進んでいないことは、それらを題材とした年画が継続して制作されていることにも見てとれる。女性の経済的独立を題材としたもの（図10）や、学校開設などを題材とした年画（図6-1）が引き続き印行された。彭の提唱は、1912年に中華民国臨時政府が成立すると、孫文（1866-1925）の指導下に公布された新たな学制に明文化され、法的整備などが早速進められている（雷良波他 1993：281-291）。

ところで、「女学堂演習図」（武強）、「女学生習武」（楊家埠）、「女学堂演武」（楊柳青）といった、女性が武装し兵式訓練を受けるさまを描いたものが、清末から民国期にかけて華北の各年画産地で制作されている。とくに「女学堂演操」の文言が見える図14は、民国期に武強で制作されたもので、一コマずつ切って窓に貼る形状の素朴な年画である。

では実際学校で女子に兵式訓練がなされていたかという点、女学校には当時の学制や教科などから、体操科目は設定されていたが、それが行われていたかは定かではない。ただし中華全国婦女連合会（1998：285-286）によれば、1912年9月に制定された「中学校令」に、依然として女子には園芸、裁縫などの家事科目があり、また三角法や「兵式体操」が免除され、授業時間数も男子より短いなどの性差が見られ、それは1919年の五四運動の際に是正が求められた、とある。つまり民国初年では、兵式訓練が行われていなかったことがわかる。

そもそも女子教育の展開を辿れば、政府による教育改革が行われる中で、1903年になって、漸く教育制度において女子の教育にも言及されるが、それは家庭教育の範疇とされる。またそれ以降の制度でも男女共学ではなく、教育期間も男子より短く、高等教育機関も未整備などと不平等な点が残された。そして中華民国臨時政府によって教育の普及が提唱される中で、とくに女子教育の発展に留意し、小学校における男女共学など、男女は同様であると規定し、高等教育機関も整備された。しかし女子に対する貞淑の徳が強調され、家事に関する科目が残るなど、やはり完全なる男女平等ではなかった。

このような状況に鑑みると、こうした年画の印行は、男性並に軍事教練を受ける力強い女性像を描くことによって、真の平等ではないことを皮肉り、女性解放や男女平等を訴えたものともとれる。前掲の「女子愛国」でも、魯憂葵は男女平等の見地から女性も参戦すべきと説いている。また『啓蒙画報』では「暹

羅女軍」(付録138号、1902年第6冊附)で、暹羅国(現タイ国)では近衛軍に女性が400人いることをあげ、本来両性の別なく国のために尽力できるとし、それを不可能にする纏足について批判する。北京や沿海都市部だけではなく、図14のように地方の絵師によっても「女学童演操」が印行されていたことは、そうした風潮の広がりを窺うことができる。また「課子教女」(山東省平度)には、男の子には勉学を教え、女の子には家庭的なことを学ばせるという様子が描かれる。やはり民国初期のものとされ、地方に根強く残る封建的な風潮を率直に描くことで、男女の不平等を訴えたものであろうか。

彭が年画制作に与えた影響で最も外形的なものとして、長文の口語文による解説文が挿入されるようになったことがあげられる。それまで伝統年画に見られる文字といえば、画面に描かれた題材と同音異義の漢字による数文字からなる成句などに過ぎなかった。しかし彭の新聞の影響を受けた改良年画には、その記述を利用した長文の解説文が挿入されている。王樹村(1995:114)は、図と文がともに重視された年画によって、それまで年画を看過してきた人々にも、子どもの教育に作用する絵画として購入されるようになったとする。こうした年画の変化及び購買層の拡大によって、為政者が年画に着目し利用し、かつ規制を施すこととなったといえるのではないか。つまり彭翼仲の提唱の影響は絵師だけではなく、時の為政者にも及んでいくのである。

3. 官製の改良年画

前述のように、改良年画の出現によってもたらされた年画の購買層の広がりは、為政者の関心を喚起した。年画生産地を膝下に有する天津では、中華民国成立早々から為政者が年画による民衆への教育作用を期待して、年画を審査したり制作に関わるなどしている。

王樹村(1998-1:11)は、1913年から1916年にかけて、直隸(現河北省)巡按使公署天津教育司社会科が、悪習を改め、取り除くことを旨として、社会教育に役立てるよう年画を改良させたとしている。その過程ではまず楊柳青の年画工房で調査を行ったうえで、天津で石版印刷による多色刷りの年画を印行したという。

「破除迷信」(図15)「游楊立雪」「家禽守信」「阿豺教子」「樓護重義」「孟母擇隣」は、それぞれ挿入文の末尾に朱印で「改良年画」と捺印され、枠外に「直

直隸教育図書局印書処「直隸教育司社会科印行」、と官製であることがことさらに示されている。「中華民國二年十二月出版」とあることから1913年の印行とわかる。描かれているのは、図15から順に、自然現象に対する科学的な思考の提唱や、教師に対する尊敬の念、勤勉や、国民としての団結、義理、教育環境の重視などをテーマとしたもので、いずれも社会教育的なものである。これらは翌年には印刷が停止されたという（王樹村 1957）。試行錯誤の中で進められた事業であったことや、臨時政府の成立後袁世凱の台頭など、政情が不安定であったことなどが要因として考えられよう。

また王樹村（1998-1：12-13）によれば、1915年には天津教育司司長李金藻が、社会に残る悪癖を取り除くことを提唱し、楊柳青の年画工房に依頼し、アヘンや賭博、早婚、売春などを戒める年画を作らせ、また封建的な題材の年画の印刷量を減らすように要請したという。そして同時期には「謊言無益」（図16）なども制作されたという。イソップの寓話でかつて彭翼仲の影響下に「莫説謊話」（図9-2）として印行されたのと同じ題材である。本図にもやはり「直隸巡按使公署教育科出版」とある。こうした年画の中には、天津教育司より報奨金を得たものもあり（王樹村 1998-1：13）、幹部から年画制作に対し直接指示が出され、またその効果などについても吟味されていたことがわかる。前掲の李金藻（1871-?）は、天津の新聞『城市快報』（2004年12月1日）に市制600年を記念した特集で、天津の著名人の一人として紹介されている。それによれば1900年代初頭に日本への留学や米国への教育視察をしており、12年に天津教育科主任となり、また晩年の1926年以降は天津教育局長や省教育庁長などを歴任している。また戯曲の改良にも貢献するなど、生涯を通じ社会教育に尽力した人物といえよう。いわば社会教育の専門的な知識を有する幹部によって、年画が有効な媒体とみなされていたといえる。

また同年に直隸巡按使公署天津教育科が年画の審査法を制定し、審査員として社会教育司弁事処処長林兆翰（1862-1933）が派遣され、年画の出版を管理したという（王樹村 1963：48；1998-1：12）。この時審査を通ったのは極少数で、吉祥慶事や歴史故事を題材としたものも廃棄の対象となった。さらには「女子自強」（図10）などの改良年画も時流にあわないとして廃棄の対象になったという（王樹村 1963：48）。

林は同年に設置された天津社会教育弁事処の主幹を務め、風俗習慣や戯曲の

改革を推進しており、伝統年画を旧習と見なし一掃しようとしたのではないか（辻（川瀬）2004：248）。また当時は袁世凱が帝政復活を企てており、微妙な時期でもあり、メッセージ性の強い年画を嫌ったのではないか。たとえば、中華民国の成立や共和制を民衆が歓迎していたことを表す「中華成立万歳」、「歓迎共和」（図17）（共に楊柳青）には、「不准翻印」とあり、再版が禁止されたことがわかる。袁世凱が帝位につき国旗も変わるという情報から印刷を取りやめたという（中国現代美術全集編輯委員会 1998-2：9）。絵師の方も為政者の動きに注意を払わなければならない状況であったことがわかる。こうしてみると今や個人の喜びとしての飾り絵は、公の貼付物として認知されるまでになったともいえる。

王樹村（1998-1：13）によれば、この後、天津教育司によって楊柳青の絵師鄭国勛（生没不詳）に年画の改良の管理が委任された。鄭は、まず民衆生活と関わりの深い春牛図や竈神図などは審査の対象外とした上で、その他の伝統年画を再版禁止、しばらく留保、再版可能の三つに分類して、大量に印行販売した。禁止になったのは一夫多妻や謀反などを題材とする少数の作品で、それ以外の歴史故事や現実生活、吉祥慶事を題材とした古来より庶民が嗜好するものなどは皆印刷が許されたという。さらに既述の斎健隆画店が印行した「女子自強」（図10）などの改良年画は、愛国精神が高いとして一律に再版が許されたという。また天津教育科からは、民間神話や歴史小説の故事を題材とした作品を制作するよう指示が出されたとする。

こうしてみると、民国成立当初の為政者による年画制作への関与は、たびたび変更されたり、また庶民が古来より愛好してきた題材を排斥するなどしている。前述のように当然政情なども考慮されなければならないが、改良年画としての教育作用は認知するものの、民衆の嗜好については理解を欠いていたことが浮き彫りにされる。また年画の扱いに戸惑っていたととれ、年画が民衆の思想形成に与える影響の大きさを物語るものである。

一方絵師である鄭国勛による裁量は民衆の嗜好を熟知しており、官民双方の理解が得られたと思われる。それは1937年に天津市が行った年画の審査記録に添付された書類に、「調査員鄭国勛」などとして彼の名が記されていることから、依然として鄭が審査に携わっていたことがわかり、その証左となろう。

実際1937年当時の審査基準（教育的意義の有無、迷信・非現実的要素の有無、芸術性及び情趣の有無）により、批准され印刷可能であったものは、193点中177点と多数にのぼる。この時廃棄となったものは、教育的に不良、不道徳、迷信的、描写表現が不正確であることなどが理由とされている。合格となったものの内容は、歴史劇、神話、伝説や物語などで、教育的に意義があることが評価されている。また吉祥や子どもを題材とした、古来から民衆の嗜好する年画が印刷を許可されており（辻（川瀬） 2004：248-249）、前掲した彼の審査形式と共通する。

こうした為政者による年画制作への関与は、軍閥闘争が激しくなり農民の購買力が低下したことにより中断を余儀なくされる（王樹村 1998-1:15）。しかしながら国家存亡の危機が顕著になるに従い、大衆に定着した年画の宣伝作用や教育作用を、積極的に活用しようという動きは断続的に行われていたようだ⁸。また前掲のように、1937年の天津市民衆教育館が制定した年画審査法、及びそれに基づく審査の記録などが見つかったことは、そうした提唱が蒋介石（1887-1975）国民党の統治下にも実行されていたことを傍証する。

4. 近代文化を捉えた時事年画

帝国主義列強の侵攻は、中国社会の近代化を物心両面で促すことともなった。とくに上海、広州、天津などの沿海都市部を中心として、飛行機や西洋建築物の出現、鉄道の敷設、また外国人や洋服を着た人々が散見されるようになった。中でもそれまで外出もままならなかった深窓の女性たちが、街を闊歩するようになった。近代文化の流入によって起こった社会のこうした変化を、絵師たちは仔細に捉え、そこに住む人々だけでなく、いまだ前近代的な社会で暮らす多くの庶民に向けて発信していった。

こうした近代文化を捉えた時事年画は、土地柄を反映し天津楊柳青や蘇州桃花塢そして上海の画店などにより盛んに刻出されている。例えば、中華民国旗が機上に翻る「飛機図」（楊柳青）、1888年に中国で最初に本格的に開通した天津（開平-塘沽間）の鉄道を描く「鉄道火輪車図」（楊柳青）、天津より早く76年に開通したが事故のために中止され、98年に再開した上海（上海-吳淞間）の鉄道を描いた「火車站」（桃花塢）、「上海新造鉄路火輪車開往吳淞」（上海）などがある。

とりわけ上海の風物を捉えた年画は枚挙にいとまがなく、上海が近代文化の代名詞となり、人々の羨望を集めていた一大都市であったことを物語る。「中外通商共慶大放花灯図」（上海）、「寓滬西紳商点灯慶太平」（上海）は、1843年に上海を開港してのち、国内外の商人が雲集しその通商の盛んなことを喜ぶさまを描く。また「新出夷場十景」（上海）のように、開港後の近代文化の流入による変化を十景として表したのものもある。西欧の娯楽や外出する中国人女性、電灯、汽車、汽船、自転車など、近代文化を象徴するものが十景として捉えられている。「海上第一名園」（上海）のように、上海の行楽地を題材としたものも複数見られる。

またその様子は、上海から遠く離れた地方の絵師によっても描かれている。行楽地に集う女性たちを描いた「上海八角亭」、自動車に乗る女性や飛行機、洋館を一画面に収めた「上海器車電船」、また1914年11月にイギリスの会社が南京路に開通させた路面電車を捉えた「四川真景全図」（四川は、南京路と交差する四川路のこと）（図18）などは、いずれも民国初期に河北省武強県で制作されている。絵師が、地域の民衆に近代文化を目のあたりにさせることにより、封建的な社会に一石を投じようとしたのではないか。また図18のように、西洋画法である透視法で描かれたものもあり、画法からも斬新な雰囲気が出される。

これらの画面に欠かせないのが、前掲の十景でもその一つとして捉えられているように、纏足から解放された女性が外出する姿である。図18のように近代文化を象徴する事象とともに描かれていたり、伝統行事を描く中に描かれていたりする。例えば古来より庶民の祭日の娯楽として親しまれてきた龍船競争を描く「鬧龍舟」（図19）（楊柳青）には、それを見物する女性として描かれる。慣れ親しんできた風景を描いた画面に挿入された近代女性の様子は、遠隔地の庶民にも違和感なく受けとめられたであろう。一方「女子騎車」（図20）（四川省綿竹）のように、近代女性そのものを題材としたものもある。

また女性が蹴鞠をする姿を描いた「十美蹴球図」（図21-1）（桃花塢）は、気球が浮かび、近代化が進む上海の上空を捉えている。蹴鞠をしている通常足の満州族と、見物する纏足の漢族の女性がともに遊ぶさまが描かれており、満漢平等を捉えたとされる（王樹村 1991上：339）。ところが図21-2は、図21-1と同じ画面に「□□妓院」（□は不鮮明）の文言が挿入されて、蹴鞠をする娼婦

とみられる女性は、図2 1-1と異なりすべて纏足の小足に描かれている。清末に上海では娼妓を救済するための施設ができ、そこで文字などの教育を受けさせて社会復帰させる措置が採られた。本図は物質的な近代化だけでなく、そうした女性の解放も捉えたものと思われる。両図ともに、絵師の社会を捉える見地の鋭さを窺うことができよう。

このように近代文化に現れた社会をそのまま写生したもののほか、伝統的な構図の中にそれらを配合したものもある。「新年吉慶接財神」及び「喜慶大来」（ともに天津）は、伝統的な「財神叫門」や「発財回家」の類の年画である。前者は洋風の家屋に流行の服装をした女性や洋服の子どもが描かれ、後者は元宝銭を運んでくる手押し車が自動車に替えられるなどして、いずれにも近代文化の象徴が現れる。また「猴搶草帽」（陝西省神木）も、伝統的な構図のままで、猿に翻弄される農民には洋服を着せている。

「二十四節気図」（図22）は、民国期に陝西省鳳翔で制作された年画である。上部には、農民が嗜好する伝統年画に欠かせない二十四節気図を三年分配せるようになっており、春牛図の様式で描かれているが、そこに登場するのは洋服を着た牧童であり、軍人である。内陸部にまで西洋化の風が流れ込んでいたことが窺える。また五色旗を挿入したり、袁世凱とみられる人物を描き、その時代の政局も捉えている。一方牧童の足に目を移せば、靴を一足しか履いていない。これは民衆間に伝わる暦法を表現したもので、干ばつなら両足とも靴を履く、雨量が多ければ両方とも裸足、片足は好天気を表すという。そうした伝統的な描画法は保たれ、民衆の需要を満たしている。

また「八里皇城街」（図23）（八里＝パリ）は、外国の街並みを紹介したものである。作者は、山東省濰県の永興成画店最後の絵師楊鎮山（1895-?）である。彼は第一次世界大戦時に傭兵として渡仏し、ヨーロッパを転々としてロシアから帰国した。その後「法国大總統」など、戦場での見聞を年画に映し出した。管見において彼以外には渡欧した絵師は確認されないが、絵師のこうした動きは、その旺盛な好奇心とバイタリティを表すものといえよう。

このほか上海の租界における外国人の結婚の様子を描いた「外国人做親」（図24-1）（桃花塢）や、パリの大通りの様子を描いた「法国馬路図」（楊柳青）もある。外国の生活文化などについては、『点石齋画報』などにみられるように、絵師たちは様々な情報を駆使して描出している。例えば同画報に、図2 4-1と

同じ題材で、吳友如による「西例成婚」(図24-2)がある。すなわち新聞や画報などから情報を得て、戦闘を描いた年画が印行されたように、外国及び外国人の文化・風習などを、様々な情報源から画面に記録し、より広範な民衆に伝える役割を果たしていたといえよう。

5. まとめ

戦闘場面を描いた時事年画は、絵師たちの耳目によって収集された情報をもとに、いずれも清軍の大勝、敵を大破する場面が捉えられた。画面には速報や来電の文言とともに、勝利を告げる挿入文があり、スピード感溢れる戦場の描写は一層現実味を帯ている。そして諸願成就を旨とし、目出たい場面を描く年画の伝統に違わず、そこには中国側の勝利の場面が誇張して描かれた。また各戦闘場面には、劉永福や董福祥、宋慶のように、愛国のために死闘を展開する武将も多用される。それは伝統年画に不可欠の吉祥物や、庶民の敬愛する『三国志演義』の関羽のように、彼らによって語り継がれたであろう。

また女性が男性にかわって戦闘に赴き、勝利をあげるさまが捉えられているものもあった。非力な女性でも戦闘に加わる様子を描くことによって反帝愛国を助長したと思われる。そして敵将を捕獲する場面や、敵の講和の求めに応じて条約を締結する場面を描いたものは、見る者に自信と希望を与えるものとなったであろう。また屈辱的な条約締結の場面を率直に描いたものは、庶民の反帝の思いを助長させ、士気を高めるものとなったであろう。このように列強との戦闘に関わる時事年画は、様々な視点で捉えられた。そして年画産地も天津、上海、蘇州、河北、山東など実に様々で、絵師たちが戦地から遠隔地にあっても、常に情報に耳目を走らせていたことがわかる。

こうした反帝愛国の気運が高まりをみせる中で、彭翼仲の啓蒙活動は展開された。彭翼仲は民衆を啓蒙活動の対象として、彼らが理解しやすいように、彼らが嗜好する演劇や図版などを改良してそれに用いるよう提唱した。絵師たちが彼の提唱を受けて印行した改良年画は、描画法はそのままに長文の口語文からなる文言が挿入された。それらは『啓蒙画報』や『京話日報』に掲載された原文をほぼそのまま引用したものもあれば、庶民に、より理解しやすい文言に改められたりして画面に挿入された。これらの改良年画には、反帝愛国、維新改良の思いが込められ、華北各地に流通していった。そして地方の絵師によつ

でも、そうした改良年画は受けとめられ制作された。改良年画の印行は、不識字の庶民が見ても理解でき、貼付期間が長く反復効果があり、また販路も広範であったために、紙上における提唱をより効果的に宣伝できたと思われる。

彭の影響により年画の画面に挿入されるようになった長文の挿入文は、購買層を拡大し、為政者が年画を教育や思想形成に用いる契機となった。為政者によって印行された改良年画には、ことさらにその関与が明記されていた。そして年画の印行に為政者は規定を設け、審査を行い、教育や思想形成などの目的から逸脱しないよう管理した。辛亥革命の勃発などで中断を余儀なくされるが、こうした年画の統制はその後も継続して行われていた。

中華民国成立以降から続くこうした為政者による年画への干渉は、いずれもその教育的意義を重視しており、その内容は一般的なものである。日中間の抗戦期以降に現れる、政策宣伝のための、あるいは戦闘を有利に展開するための年画は、為政者の意図を積極的に打ち出したものであり、彼らによる利用がさらに進展したものといえる（川瀬 2000）。このような、いわば為政者の武器となる以前の年画利用を提唱する動きや、その影響下に制作された年画について、さらに精査することは今後の研究課題としたい。

また近代文化の流入も絵師たちによって、様々な角度から捉えられていた。彼らはそこに近代文化を象徴する事象を刻出することによって、前近代的な社会に暮らす人々を喚起した。絵師たちは、電車や飛行機などの物質的な近代化を描画しただけでなく、纏足がほどかれ自由に外出するようになった女性を、日常の風景の中に描き出した。それらによって、中国社会に長期に渡って形成されてきた、女性に対する様々な制約からの解放が伝えられた。

同じ頃、上海、広州などの沿海都市部では、盛んに商品宣伝と購買促進を狙い、年末に商品の景品としてカレンダーを配した月份牌年画（或いは月份牌）が生産されていた。そこには主に流行の衣装を着た或いは半裸体のモダンガールとともに、洋館やその室内、外国犬などが描かれ、また彼女たちがゴルフや自転車などに興じるさまが描かれた（図25）。モダンガールには映画俳優が起用されるなどし、それは都市部の庶民の熱い眼差しを一身に受けた。

一方年画では市井の人々が行き交う日常の暮らしを切り取った中に、自然に近代文化が描かれており、身近な現実と受けとめることができる。月份牌は、およそ庶民の生活とはかけ離れた夢の世界が描かれ、憧憬はするものの親近感

は抱かれない。憧れの対象として一世を風靡した月份牌と異なり、庶民と等身大に設定された絵師の目線を通して描写された年画は、庶民にも手の届くものとしてより円滑に受容されたと思われる。

近代に現れた時事年画や改良年画には、絵師の反帝愛国、維新改良の思いが込められていた。年画が民衆間で育まれ彼らの思いを反映した絵画であることに鑑みれば、そこにはとりもなおさず庶民の思いが代弁されていたといえよう。

<謝辞>

本稿は名古屋大学博物館による平成16年度総長裁量経費「教育研究改革・改善プロジェクト」の研究成果の一部である。2005年1月の北京における調査では、中国国家博物館の花実氏並びに中央美術学院の薄松年氏に大変お世話になった。この場を借りて深く感謝申し上げる。

注

- 1 王樹村の著作においてたびたび指摘されている(1963:48;1980a:12;1980b;1991b:17;1995:107-116など)。王樹村(1994.11.15書簡)は、彭翼仲による年画についての論文は早期の『京話日報』で発表されたものと思われるが、いまだ実見には至らず、調査することも難しいとしていた。氏の論述は、1956年から66年まで政府文化部の管轄下に美術家協会の調査員として、年画産地で行った調査の際の聞き取りによるものと思われる。
- 2 『啓蒙画報』は、1902年6月-1903年2月:第1冊-第7冊、1903年3-7月:第8冊-第12冊とする。『京話日報』は、1904年8-12月:1-169号、1905年1-6月:170-341号、1905年7-12月:342-513号、1906年1-4月:514-654号、1906年5-9月:655-751号とする。なお本稿ではすべて陰暦月を陽暦月に改めた。
- 3 たとえば「説戯子急宜改良」(1904年第106号1頁)、「同」続(1904年第107号1頁)、「改戯」(1905年第291号1-2頁)、「戯本趕緊改良」(1905年第442号1頁)、「諸禁唱本」(1905年第490号1頁)、「戯具改良」(1905年500号6頁)などの社説がある。
- 4 日本から帰国した民主運動家2名が秘密裏に殺害されたことを『中華報』(1906年9月2日「保皇党之結果」)に掲載したために、彭翼仲は袁世凱の命により逮捕され、『中

華報』『京話日報』ともに封鎖せられ、1907年から新疆に10年間幽閉されることとなった(姜緯堂 1996)。辛亥革命により1913年3月に帰京し、同年8月に再び『京話日報』の発行を始めるが、袁世凱の国会解散に前後し、再び袁により封鎖される。1916年袁の死後に発行を再開し、1921年に彭翼仲は病死するが、翌年4月まで発行された。

- 5 河北梆子の芸人。芸名響九霄など。性質は剛胆で、深く責任感に溢れている。1876年12歳で河北省琢県双順科班で演劇を学び、1879年15歳で頭角を現す。後に北京で演じるようになり宮廷内にも出入りした。その際維新派の人士と親交を深め、戊戌の政変失敗により、上海に逃亡するが、3年後に帰京。光緒末年に戒煙会を設立し、「黒籍冤魂」「拿櫻栗花」などの演目をプロデュースし、収益金でアヘン中毒者を救済した。また改良新劇「惠興女子」をプロデュースし、自ら主演して多大な影響を及ぼした。辛亥革命後は、北京に初めての女子演劇員養成学校を設立した(中国大百科全書編集委員会 1983)。
- 6 女学校の設立は、1844年にキリスト教会の活動の中で男女平等の西欧的見地から、英国の女性団体によって寧波に設立されたのが最初(中華全国婦女連合会 1998:34)。中国人による女学校の設立は戊戌政変後、梁啓超などを発起人として強国保種の見地から賢妻良母の養成を狙いとして、1898年5月に初めて上海に経正女学堂が開学した(雷良波他 1993:211-212)。こうした女学校では、いずれも授業科目には体操も含まれているが、内容は不明。
- 7 筆者が1994年5月に行った天津市档案馆における調査で、同館により天津市民衆教育館が行った年画審査に関する記録や、審査に付随する各機関の送り状、展覧会の日程表などが『天津市民衆教育館全案』として纏められているのが見つかった。「天津特別市教育局指令」(1937年12月29日付、第01186号)をはじめとする文書などに「調査員鄭国勛」と記されている。
- 8 王樹村(1998-1:15)は、徐熙影 1935「幾種亟待改造の大衆芸術」(『庸報』7月15日)、及び王次凡 1937「為救亡不能不強調通俗化」(上海語文社編『通俗文化問題討論集』新知書店)などでの記述をあげる。

<参考文献>

市古宙三

1990『中国の近代』(世界の歴史20) 東京:河出書房新社

濰坊楊家埠年画全集編委会

1996『潍坊楊家埠年画全集』北京：西苑出版社

王樹村

1957「漫談民間年画」『人民日報』年1月1日第8面

1963「民間画版散聚記」『文物』(2) 47-51頁

1980a「關於民間年画」『美術研究』(2) 12-16頁

1980b「年画」『旅游』(1) 28-29頁 北京：旅游雜誌社

1991上『中国年画史図録』上 上海：上海人民美術出版社

1991下『中国年画史図録』下 同

1991a『中国民間年画史論集』天津：天津楊柳青画社

1991b「楊柳青年画史概要」『中国民間年画史論集』 5-24頁

(原載『楊柳青年画資料集』1959年北京人民美術出版社)

1995『中国民間年画』(中国民間文化叢書) 杭州：浙江教育出版社

1998-1「中国現代年画史叙要」『中国現代美術全集』年画卷1 3-32頁 瀋陽：遼寧美術出版社

翁独健

1990『中国民族關係史綱要』北京：中国社会科学出版社

川瀨千春

2000『戦争と年画-「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダ-』千葉：梓出版社

姜緯堂

1985「『啓蒙画報』五考」『新聞研究資料』(30) 191-203頁 北京：中国社会科学院新聞研究所

1996「彭翼仲案真相」『首都師範大学学報』(社会科学版)(5) 16-24頁

黄河

1983「清朝末年の北京報刊」『新聞研究資料』(41) 171-182頁

上海圖書館近代文献部

2000『清末年画匯萃』上海圖書館館藏精選 上海：人民美術出版社

朱德發

1986『中国五四文学史』濟南：山東文芸出版社

商務印書館

1931『最近三十五年之中国教育』北京：商務印書館

中華全国婦女連合会

1998 『中国婦女運動史』 北京：春秋出版社

中国現代美術全集編輯委員会

1998-1 『中国現代美術全集』年画卷1 瀋陽：遼寧美術出版社

1998-2 『中国現代美術全集』年画卷2 同

中国新聞史学会

2004 『新聞春秋』（8） 北京：『新聞春秋』雜誌社

中国大百科全書編集委員会

1983 『中国大百科全書』戯曲・曲芸巻 393-394 頁 北京：中国大百科出版社

張奇明

2001-1 『点石齋画報』大可堂版（1）：1884年5月から1885年4月 上海：上海画報出版社

2001-2 『点石齋画報』大可堂版（2）：1885年4月から1886年4月 同

張春峰

1996 『河北武強年画』 石家庄：河北人民出版社

陳煙橋他

1955 『華東民間年画』 上海：上海人民美術出版社

辻（川瀬）千春

2003 「年画を通してみた世相史-建国直後〜90年代」『桜花学園大学研究紀要』（4）
267-288 頁

2004 「旧正月の飾り絵から為政者の新芸術へ-近代年画の出現を契機とするプロパガンダにおける年画の展開-」『平井勝利教授退官記念中国学・日本語学論文集』243-263 頁 東京：白帝社

丁守和

1987 『辛亥革命時期期刊紹介』（1）-（5） 北京：人民出版社

天津楊柳青画社

1992 『天津楊柳青木版年画集』 天津：天津楊柳青画社

唐浩明

1994 『曾国藩全集』書信巻（30） 長沙：岳麓書社

中野美代子他

1989 『世紀末中国のかわら版』 東京：福武書店

彭望蘇

1999 「愛國維新報人彭翼仲先生」『北京文史資料』(60) 47-74 頁

2000 「文采風流今尚存-百年之前的兒童刊物『啓蒙畫報』」『貴州文史叢刊』(5) 24-31 頁

方漢奇

1981 上 『中國近代報刊史』 太原：山西人民出版社

1981 下 『中國近代報刊史』 同

薄松年

1986 『中國年畫史』 瀋陽：遼寧美術出版社

三山陵

2003 「『點石齋畫報』創刊的契機を作った「時事版畫」-ロシア収蔵中国民間版畫調査より」『東方』(266) 7-11 頁 東京：東方書店

姚遷

1985 『桃花塢年畫』 北京：文物出版社

雷良波他

1993 『中國女子教育史』 武漢：武漢出版社

ラワンチャイクン壽子他

2004 『チャイナドリーム-描かれた憧れの中国-広東・上海』 福岡：福岡アジア美術館 他

梁漱溟

1960 「記彭翼仲先生--清末愛國維新運動 一個極有力人物」『文史資料選輯』(4) 98-126 頁 北京：中華書局

林培炎

2004 「志同道合的文化啓蒙先驅-彭翼仲与劉炳堂在報業活動中的親密合作」『新聞春秋』(8) 8-9 頁

<圖版典拠>

図 1-1：陳煙橋他 1955：39

図 1-2：張奇明 2001-2：56

図 2：濰坊楊家埠年畫全集編委會 1996：191-192

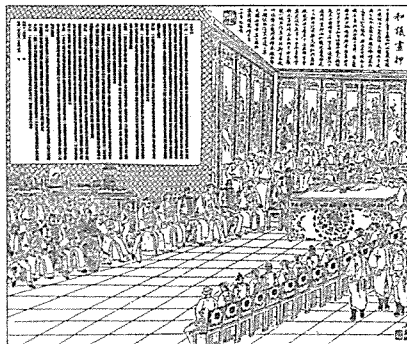
図 3：上海圖書館近代文獻部 2000：下 90

- 圖 4：上海圖書館近代文獻部 2000：下 86
- 圖 5：複寫資料王樹村氏提供
- 圖 6-1：王樹村 1995
- 圖 6-2：『啓蒙畫報』雜俎、1902 年第 2 冊 20 頁
- 圖 7-1：『啓蒙畫報』倫理、1902 年第 5 冊 23 頁
- 圖 7-2：王樹村 1991 下：545
- 圖 8：『啓蒙畫報』倫理、1902 年第 6 冊 1 頁
- 圖 9-1：『啓蒙畫報』倫理、1902 年第 7 冊 1 頁
- 圖 9-2：王樹村 1991a
- 圖 10：王樹村 1995
- 圖 11：王樹村 1991 下：546
- 圖 12：王樹村 1991a
- 圖 13：張春峰 1996：182
- 圖 14：筆者藏
- 圖 15：中國現代美術全集編輯委員會 1998-2：10
- 圖 16：王樹村 1991 下：547
- 圖 17：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：27
- 圖 18：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：20
- 圖 19：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：23
- 圖 20：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：33
- 圖 21-1：王樹村 1991 上：339
- 圖 21-2：上海圖書館近代文獻部 2000：下 114
- 圖 22：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：8
- 圖 23：中國現代美術全集編輯委員會 1998-1：13
- 圖 24-1：王樹村 1991 上：340
- 圖 24-2：張奇明 2001-2：198
- 圖 25：筆者藏

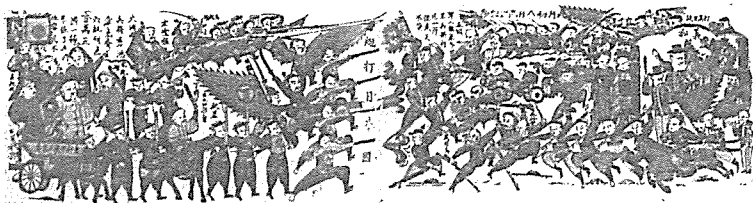
1-1



1-2



2

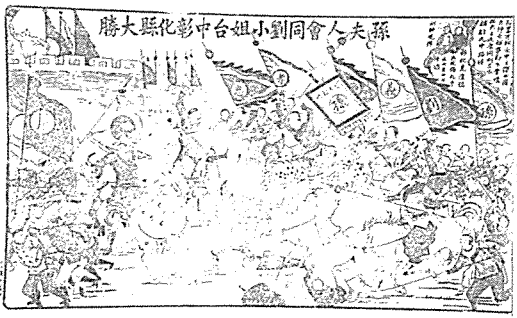


3

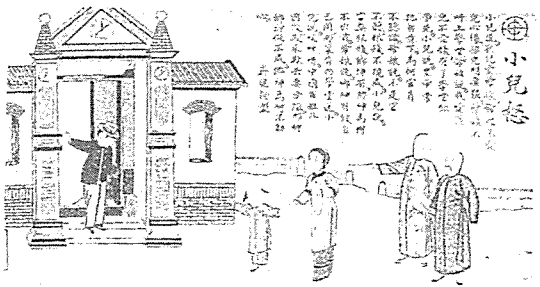
4



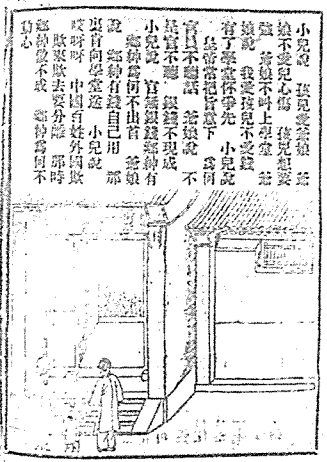
5



6-1



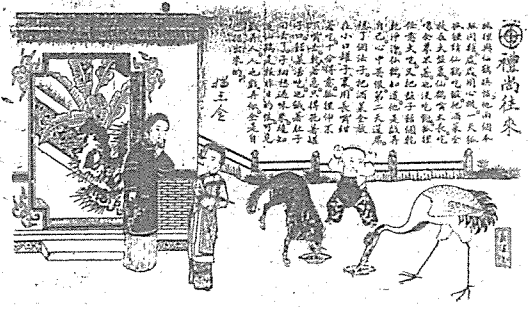
6-2



7-1



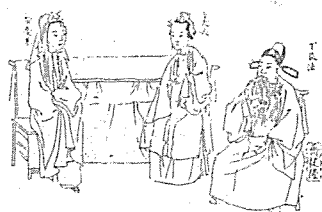
7-2



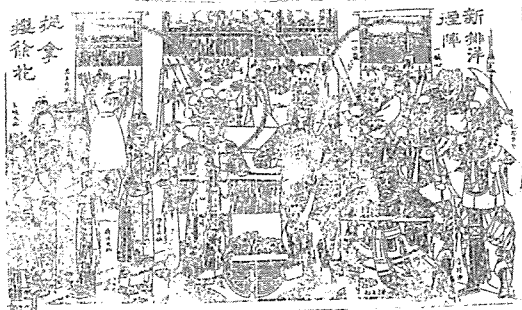


12

國愛子女



13

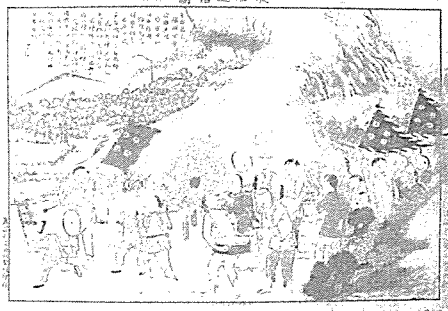


14



15

國信通政



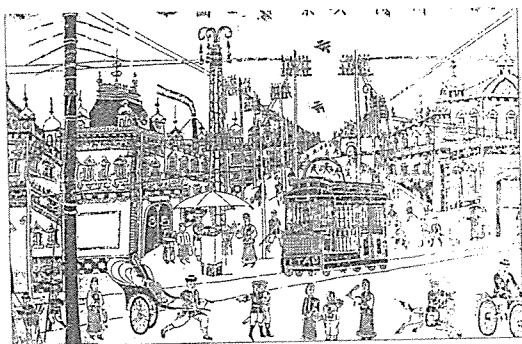
16



17



18



19



20



21-1

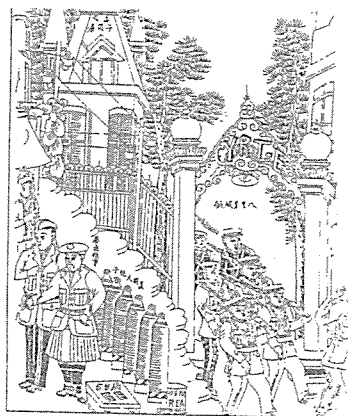


21-2

22



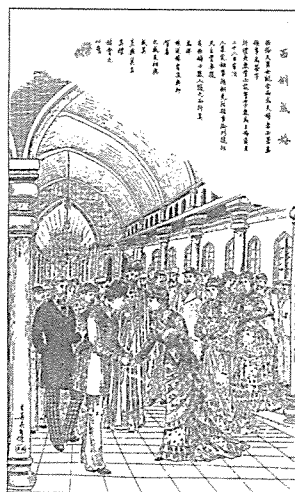
23



24-1



24-2



25

